# 英語で自分の思いや考えを伝える力を育む授業を目指して
## －　概念図を活用した言語活動の工夫を通して　－

大崎市立古川中学校　寺田　達矢

## １　目指す授業像

社会的な話題について，自分の思いや考えを整理し，まとまりのある内容で伝えることができたと実感できる授業

## ２　研修テーマ・目指す授業像に迫るために

本校の生徒は，英語の語句や基本的な表現を覚えようとする意欲はあるが，それらを活用して自分の思いや考えを表現しようとすると上手く伝えることができない。４月に行った学習アンケートでは，「自分の思いや考えを伝えることができていると実感している」，あるいは，「どちらかといえばできた」と回答した生徒が 30%と低い結果であった。これは，これまでのスピーチなどの活動が，事前に原稿を書くことが多く，実際に話す時間が少なかったことや，目的や場面を意識した言語活動の設定が不十分で，授業を通してどんなことができるようになるのか見通しが持てなかったことなどが一因だと考える。

そこで，本研究では，生徒が単元の学習を通してできるようになることを見通すことや，伝えたい情報を整理し，自分が伝えたいことを相手に伝える力を育むことができるように，次の３つの手立てを講じて授業実践を行った。

(1) 目的や場面を意識した言語活動の設定と学ぶ内容の明確化

単元を通してできるようになることを教師と生徒が見通すことができる「ＣＡＮ－ＤＯリストの形での学習到達目標」を基にした「単元目標シート」を活用する。

(2) 自分の思いや考えを表現するために必要な語句や基本表現の定着

自分の思いや考えを伝えるときに有効な語句や基本表現は繰り返し口頭練習を行う。授業開始時のウォームアップで既習の単語や文法事項を復習し，それらを用いてペアで話す活動や読んだ内容を自分の言葉で伝えるストーリーリテリングを行う。

(3) 自分の思いや考えを整理し，まとまりのある内容にするための手段の工夫

生徒が伝えたい情報を整理し，原稿を介さずに自分の思いや考えを伝えやすくするように，メモやキーワード，絵などで話の筋道が立てられた概念図を活用する。

## ３　Ｉ期の取組について　　【単元名　Unit3 Fair Trade Event】（東京書籍　NEW HORIZON English Course3）

(1) 研修テーマに迫るための手立て

Ｉ期では，中学校３年生「Unit3 Fair Trade Event」の単元において授業実践を行った。事前に行ったレディネステストでは，半数以上の生徒が，単元で扱われている不定詞の形・意味・用法や自分の思いや考え，そして，その根拠となる理由を表すときに有効な表現が定着していることが分かった。しかし，授業の実態調査では，英語で自分が伝えたいこと上手く表現することができないと思っている生徒が全体の 70%いて，これまでに学んだ知識を上手く活用できていないことが分かった。

また，本単元で扱われているフェアトレードについては，ほとんどの生徒が「聞いたことがない」と回答しており，フェアトレードの仕組みや商品について関心が低いことが分かった。

そこで，Ｉ期では，自分の思いや考えを伝えるときに有効な語句や基本表現を定着させ，メモやキーワード，絵などが書かれた概念図を用いて，テーマについて自分の考えを伝える授業を実践した。

また，生徒のフェアトレードへの関心を高めることが話す意欲の向上につながると考えた。

(2) 具体的な手立て

① 目的や場面を意識した言語活動の設定と学ぶ内容の明確化

英語で自分が伝えたいことを表現することができていないと考えている生徒が多いことから，まずは，生徒の話す意欲や関心を高められるようにする。生徒が興味関心を持つことができる課題や場面設定をすることが大切だと考え，本時では，「フェアトレード商品を買いたいと思うかについて３文程度で自分の考えに理由を加えて話す」活動を行う。また，単元末の話すことのパフォーマンステストでは，「フェアトレード会社の社員として，企業にフェアトレード商品を宣伝する」というテーマを設定する。実際にフェアトレードの商品を見せたり，発展途上国の現状やフェアトレードに関わっている方々の思いを紹介している映像を見せたりすることで，生徒が「楽しそう」「伝えてみたい」という意欲を持てるようにする。

また，単元を通してできるようになることを教師と生徒が見通すことができる「単元目標シート」を活用し，単元の学習の中で行う言語活動に見通しを持つことや，次時に学ぶ英語表現も確認させるようにする。

② 自分の思いや考えを表現するために必要な語句や基本表現の定着

自分の思いや考えを伝えるときに有効な語句や基本表現は繰り返し口頭練習を行う。また，授業開始時のウォームアップで既習の単語や文法事項を復習し，それらを用いてペアで話す活動や読んだ内容を自分の言葉で伝えるストーリーリテリングの活動を行う。その際には，英語が苦手な生徒も安心して取り組めるように１・２年生で学習した簡単な表現を使って説明させたり，ペアやグループなどの学習形態を工夫したりする。さらに，読んだ内容について，自分の感想を一言加えて話す場面を設定する（図１）。

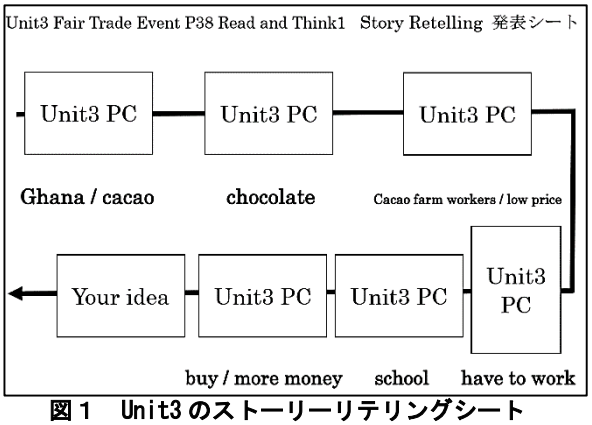


**図１ Unit3 のストーリーリテリングシート**

**※PC=Picture card（以下同様に表記）**

③ 自分の思いや考えを整理し，まとまりのある内容にするための手段の工夫

生徒が伝えたい情報を整理し，自分の思いや考えを相手に伝えることができるように，メモやキーワード，絵などで話の筋道が立てられた概念図を活用する。Ｉ期では，単元で扱われている内容の絵やキーワードを基に教師が概念図を作成し，生徒が話の筋道を立てる手掛かりとなるものを活用する（図２）。

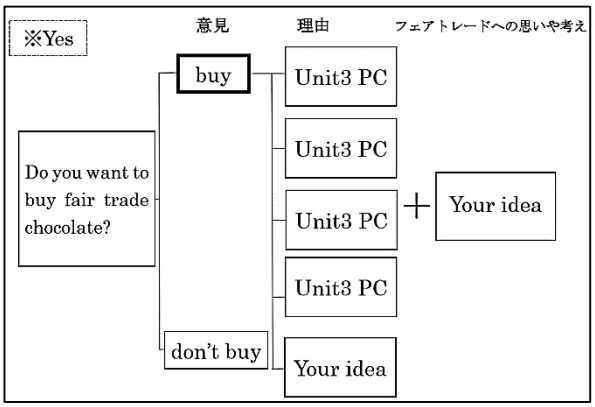


**図２ 本時で活用した概念図**

(3) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

① 目的や場面を意識した言語活動の設定と学ぶ内容の明確化

○ 本時の言語活動やパフォーマンステストの課題や場面を工夫したことで，話す目的が明確になり，自分の考えを伝えたいという生徒の意欲が高まった。また，フェアトレードに関する映像や数種類のフェアトレード商品の実物を見せたことが，フェアトレードの仕組みやねらいなどを理解し，フェアトレードへの思いを豊かにすることにつながった。Unit3 の学習終了後に行ったアンケートでは，「フェアトレードにとても興味が持てた」と回答した生徒が 80％であった。

○　Unit3 の単元目標シートの作成では,「パフォーマンス課題の設定」や「単元を通して生徒にできるようにさせたいこと」などについて十分に検討してきた。単元到達目標の達成のために一つ一つの授業をつなげていく視点で授業の流れを組み立てることができた。

●　本時の言語活動のテーマ「フェアトレード商品を買いたいと思うか」について，フェアトレードに関する映像やフェアトレード商品を見せていくことが，生徒の話すことの意欲を高めることにつながったが,映像や実物を提示したことで，生徒の意見に偏りが見られたことがあり，生徒の多様な考えを引き出す工夫が必要であった。

②　自分の思いや考えを表現するために必要な語句や基本表現の定着

○　ストーリーリテリングでは，教科書本文の内容をそのまま暗唱させるだけではなく，自分の考えを付け加えたり，聞き手に質問をしたりする場面や教科書の登場人物になりきって話す場面を設定した。本時の言語活動や単元末のパフォーマンステストでは，簡単な自己紹介や挨拶から話し始める生徒が見られた。

●　授業開始時のウォームアップで既習の単語や文法事項を用いてペアで話す活動を行ってきたが，設定したテーマがパターン化してしまい，本時の学習内容につながらない活動となってしまうことがあった。

③　自分の思いや考えを整理し，まとまりのある内容にするための手段の工夫

○　本時の活動で使用した概念図について学習アンケートを行ったところ,「概念図は自分の思いや考えを伝えることに役立った」と回答した生徒が全体の 70%であった。英語をあまり得意としない生徒や英語が得意であっても自分の考えを伝えるのが苦手と考えている生徒にとって概念図は有効な手立てであることが分かった。

○　概念図を活用して自分が伝えたいことを表現する前に，本時の言語活動のテーマについて日本語で自分の考えを持たせたり，友人と意見を交流する時間を設定したりしたことで，概念図に書かれていない情報を加えながら話そうとする生徒が見られた。

○　概念図にストーリーリテリングで活用したメモやキーワード，絵などを使用したことで，これまでに学習した内容と本時で学習する内容を関連付けながら活動を進めることができた。

●　本時で活用した概念図は，ストーリーリテリングで使用したメモやキーワード，絵などを基に教師が作成した。「概念図は自分が伝えたいことを話すことに役立った」と回答した生徒が全体の 70%であったが，特に，英語が得意な生徒を中心に「概念図がなくても話すことができた」の回答も全体の 15%であった。以上のことから，教師が作成した概念図は，生徒の思考の広がりを狭めてしまうことがあると分かった。

●　生徒が伝えたいことのメモやキーワードを自由に書くことができるようにしたが，英語を苦手とする生徒は「メモやキーワード」ではなく「英文」で話す内容を書いていたことから，単に英文を読んでしまう活動になってしまうことがあった（図３,図４）。

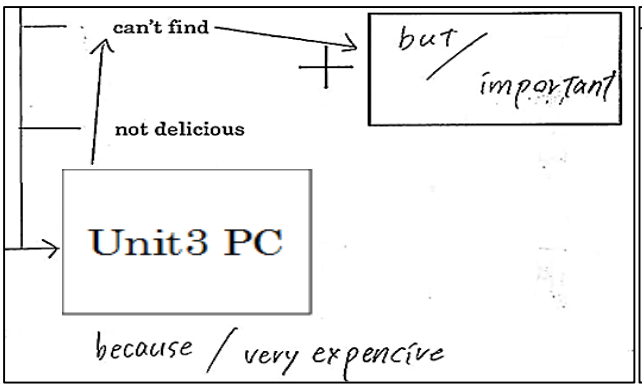


**図３　メモやキーワードのみの概念図**

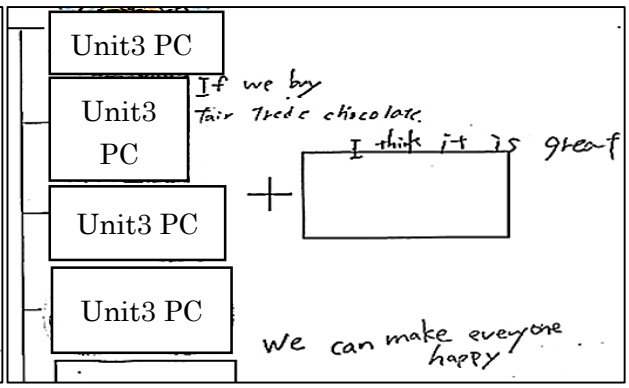


**図４　英文が書かれた概念図**

## ４　Ⅱ期の取組について　　【単元名 Living with Robots-For or Against】（東京書籍 NEW HORIZON English Course3）

(1) 研修テーマに迫るための手立て

Ⅱ期では，中学校３年生「Living with Robots-For or Against」の単元において授業実践を行った。本単元で扱われているロボットには，多くの生徒が関心を持っていたが，「ロボットは私たちの生活に必要か」については，80％の生徒が「必要」と考えている一方で，「不必要」と考えている生徒も見られた。

Ⅱ期でも，生徒の話す意欲を向上させるために「ロボットと人間の暮らし」への関心を高め，単元で扱われている絵やキーワードが書かれた概念図を活用した。Ⅱ期の概念図は生徒に作成させ，テーマについて伝えたいことを自由に伝えられるようにした。

(2) 具体的な手立て

① 目的や場面を意識した言語活動の設定と学ぶ内容の明確化

Ⅱ期でも「単元目標シート」を活用する。本時は，「ロボットとの共存について，自分の意見に理由を加えながら話す」活動を行う。また，単元末の話すことのパフォーマンステストでは，「学校に導入してほしいロボットを校長先生にアピールする」というテーマを設定する。本単元で扱われているロボットは，私たちの生活や未来に大きく関わっている社会的なテーマであることから，単元の学習を始める前に，現代の様々な場面で活躍しているロボットや近い未来に登場するロボットを紹介している映像を見せたり，「ロボットと人間の暮らし」について友人と話合いを行わせたりすることで，生徒の多様な考えを引き出すことができるようにする。

② 自分の思いや考えを表現するために必要な語句や基本表現の定着

授業開始時のウォームアップで行うペアで話す活動は，使用させたい語句や基本表現が本時の学習につながるものや単元末の話すことのパフォーマンステストでも有効なものを扱う。また，ストーリーリテリングでは，Ⅰ期のように，教科書の登場人物になりきって話す場面を設定するだけではなく，登場人物の心情を推測して表現させたり，それに対する自分の考えを付け加えさせたりすることで，まとまりのある内容を話すことができるようにさせる。

③ 自分の思いや考えを整理し，まとまりのある内容にするための手段の工夫

Ⅰ期では，自分の考えを伝えやすくするように，単元で扱われている内容の絵やキーワードを基に教師が概念図を作成してきた。これらは，英語で伝えることがあまり得意ではない生徒には有効な手立てであったが，反面，教師が生徒に話させたいものを誘導してしまう場合があることも分かった。Ⅱ期では，テーマについて，日本語で十分に意見交流をさせた上で，概念図を生徒に作成させる。

(3) 成果と課題（○：成果　●：課題）

① 目的や場面を意識した言語活動の設定と学ぶ内容の明確化

○　Ⅰ期と同じように「単元目標シート」を活用し，本時の言語活動やパフォーマンス課題を明示した。Unit5 の学習終了後に行ったアンケートでは，「ロボットと人間の暮らしに興味を持てた」と回答した生徒が全体の 80％を超え，生徒のテーマへの関心の高まりが見られた。

○　Ⅱ期で使用した単元目標シートの裏面には，学習した内容を文章で振り返る自己評価カードの役割を持たせた。生徒は学習の成果や反省を一目で振り返ることができるとともに，教師は生徒の現状を把握することができた。

② 自分の思いや考えを表現するために必要な語句や基本表現の定着

○　継続してストーリーリテリングを行ったことで，単元で学習する語句や基本表現の定着を図ることができた。また，教科書の内容を内在化させ，自分の考えも付け加えることができた生徒は，本時の言語活動や単元末に行った話すことのパフォーマンステストでもまとまりのある内容を話すことができた。

③　自分の思いや考えを整理し，まとまりのある内容にするための手段の工夫

○　テーマについて日本語で十分な意見交流をさせた後に，生徒に概念図を作成させたことで，表現の幅が大きく広がった。ストーリーリテリングで使用した英語を用いて表現したり，教科書から得た情報を基に，自分の考えを自由に伝えたりしている生徒が多く見られた（図５，図６）。

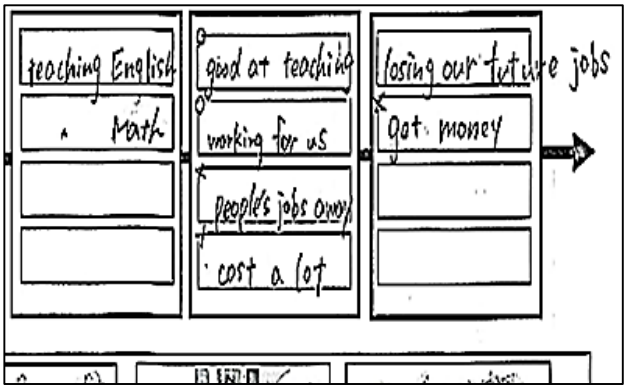


**図５　本時で生徒が作成した概念図**

I agree with Kota. For example, these are my robots teaching English and math. They're good at teaching. Robots working for us are amazing. But they're taking people's jobs away and robots cost a lot. I'm worried about losing our future jobs. We will not be able to get money in the future.

**図６　図５の概念図を用いて生徒が発表した内容（下線部は図５で書かれたキーワード）**

○　Ｉ期では，英語を苦手とする生徒を中心に，概念図に「メモやキーワード」ではなく「英文」で話す内容を書いていたことから，概念図の下に「英文を書くスペース」を設け，このスペースに英文を書かせた。その後，書いた英文を基にメモやキーワードを概念図に書かせ，発表するときは概念図だけを見るようにさせた。英語が苦手な生徒でも活動に前向きに取り組むことができていた。

● 概念図を用いて「英語を話す」ということだけに注目してしまうと，英文と英文の内容につながりがなく，聞き手に分かりやすい展開になっていないことがあった。「機械的に英語を話す」のではなく「話す内容の構成を考えて自分の思いや考えを伝える」ことができるような概念図の構成ついてもっと検討するべきであった。

● 「聞き手に分かりすい展開や構成を考えて話す」ことができている生徒の多くは，声の大きさや姿勢，表情に注意しながら話すことができていたが，さらに，聞き手の理解を確かめながら自分の考えを伝えることができる発表の仕方についても十分な指導をするべきであった。

## ５　１年間の総括

(1) 研修の成果

①　目的や場面を意識した言語活動の設定と学ぶ内容の明確化

「単元目標シート」を活用し，生徒は単元の学習を通してできるようになることを意識しながら学習を進めることができた。Unit5 の学習終了後に書かせた自己評価カードの記述には，「パフォーマンステストに向けて少しずつ自分の考えを深めることができた」や「これまでに学んだことを振り返ることができ，自分の成長を実感できた」などとあり，生徒の学習意欲の向上につながったと考える。今後も，生徒の興味・関心を高められる言語活動のテーマを設定し，単元到達目標の達成のために一つ一つの授業をつなげていく視点を持って授業を実践していく。

②　自分の思いや考えを表現するために必要な語句や基本表現の定着

本時の学習や単元末に行う話すことのパフォーマンステストにつながるペアで話す活動やストーリーリテリングを継続して行ってきた。これらの活動が単元で学習する語句や基本表現の定着につながったのかを検証するため，２学級を対象に，６月から 11 月までの３回の定期考査で出題した

「言語や文化についての知識・理解」における正答率を比較した。その結果，6月から11月までに行った定期考査において，正答率に上昇が見られた生徒は71.8%であった。また，Ⅱ期のストーリーリテリングでは，教科書の登場人物の心情を推測して表現させたり，それに対する自分の考えを付け加えさせたりしたことで，単元末に行った話すことのパフォーマンステストにおいて生徒の発話量が増えた。

③　自分の思いや考えを整理し，まとまりのある内容にするための手段の工夫

教師が作った概念図よりも，生徒が作成した概念図を活用した方が，生徒の発想が広がり，伝えたい内容を自由に表現することにつながった。「自分の思いや考えを伝えることができる」とは，「機械的に英語を話す」のではなく，「聞き手に分かりやすい展開や構成などを意識しながら自分の考えを伝えることができているか」が大切な視点である。全国学力・学習状況調査の「話すこと」で出題された「3まとまりのある内容を話す」を12月にも実施したところ，4月のときの正答率と比べて，18.5%の上昇が見られた。特に，英語を苦手とする生徒の正答率が大幅に上がっていて，これまでに実践してきた概念図を活用した言語活動は，自分が伝えたいことを表現する力を高める一因となったと考える。また，図7のアンケート結果から，「自分の思いや考えを伝えられたと実感できた」，「どちらかといえばできた」と答えた生徒は，4月では30%だったが，12月には88.3%であった。そのため，概念図の活用は，「テーマについて自分の思いや考えを伝えられた」と実感できる生徒の育成につながることが分かった。

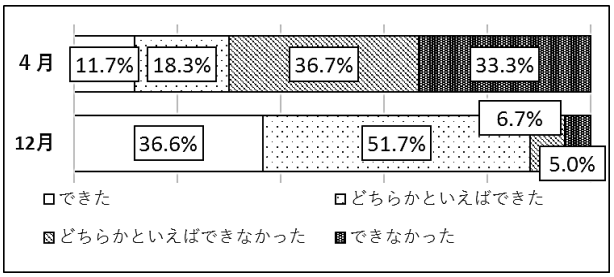


**図7　自分の思いや考えを伝えられたと実感できましたか**

(2) 今後の課題

Ⅱ期で使用した概念図には，「テーマについて自分の立場を示し，それに対する理由や意見を述べる」などの話の筋道は提示していて，その流れに基づいて自分が伝えたいことをメモやキーワードで整理し，まとまりのある内容で自由に伝えられるようにしてきた。今後は，テーマについて話の筋道も自ら考え，メモやキーワードを基に自分の思いや考えを伝えられるような段階的な概念図の活用について考えていく。

また，評価の仕方についても検討する。Ⅰ期 Unit3 の話すことのパフォーマンステストの評価は，テーマについて「自分の思いや考えに理由を加えて3文程度で話す」とし，Ⅱ期 Unit5 では，「話のつながりを持たせながら自分の思いや考えを表現する」とした。今後は，生徒の言語活動の取組を適切に評価するルーブリックを活用した評価を取り入れていく。

**主な参考文献**

文部科学省：「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　外国語編」　文部科学省 2017

文部科学省国立教育政策研究所：平成31年度全国学力・学習状況調査報告書　文部科学省国立教育政策研究所 2019

**図表等の許諾について**

図3，4，5は授業実践の中で生徒が記入したワークシートである。また，図6は生徒が発表した内容である。記入生徒の氏名を伏せて資料を活用することとし，生徒の保護者から使用許諾を得た。